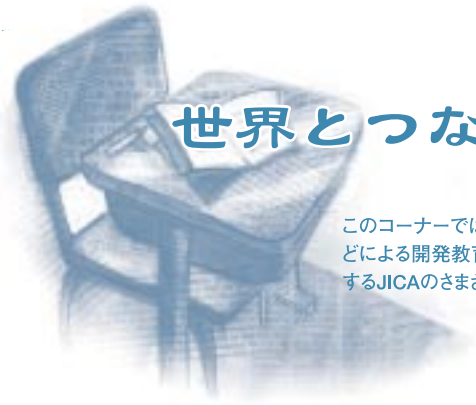


世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。



考える力を身に付ける 2泊3日の共同合宿

JR二本松駅からバスに乗り継ぐこと30分、緑の木々に覆われた山中に、JICA二本松がある。1994年に開設されて以来、青年海外協力隊の派遣前訓練のほか、開発



一枚の布が世界ではさまざまな用途で使われていることを、実践を交えて伝える布田さん(中央)。「楽しく学び、遠い国の人々のことを身近に感じてほしい」

途上国からの研修員受け入れや、福島県、NGOとの連携事業などを積極的にを行い、地域の国際協力活動を支える拠点施設となっている。
今年9月、ここに国際協力やボランティアに関心のある県内の高校生約30人が集まり、「ユース国際協力ミーティング2007」が開催される。これは、JICA二本松で最も長く続けられている開発教育プログラムの一つで、中学生が協力隊の役割や国際協力について学ぶ、県主催の「中学生体験入隊事業」として95年に始まって以来、毎年実施され、回数を重ねるうちに、対象は中学生から高校生へ、日程も1日から2泊3日へと発展。今年で13回目を迎える。

ユース国際協力ミーティングin福島

高校生が地球市民の 生き方を発見!

福島県のJICA二本松では、毎年、高校生を対象に「ユース国際協力ミーティング」を実施している。一般公募で集まった高校生が、2泊3日の合宿を通して国際協力に関する熱い議論を重ね、自分たちにもできる国際ボランティアの道を探っている。

昨年年度までの名称は「ユースボランティアミーティング」。

付けること。そのため、参加型の講座を多く取り入れている。

「開発教育とは 生き方を探る」

昨年の場合、まず1日目は、在住外国人との交流を通じて世界の文化、習慣に触れる「地球体験キャラバン」や、パラグアイのお茶を飲んだり、スリランカのシンハラ語で会話を試みるなど、途上国の庶民生活を疑似体験した。「異文化を楽しく学びつつ、まずは途上国の人々も同じ人間だと感じてほしい」(布田さん)。

2日目は、途上国への理解をさらに深めるため、「貿易ゲーム」に挑戦。これは、資源や資金、技術に見立てたはさみや定規、鉛筆などを持つ国と持たざる国に分かれ、それ



貿易ゲームのひとつ。自国の利益を上げようと、必死に交渉し合っている

らの道具を使って富を多く築くことを競うシミュレーションゲームで、経済格差が拡大していく自由貿易の仕組みを体感できる。貧しい国が豊かな国と交渉を重ねるうち、「自分たちには何もない」とあきらめてしまう高校生もいたが、布田さんは「そういうところで世界の不等等に気付いていくんです」と話す。

こうして南北問題について知った次は、元協力隊の体験談を聞き、途上国の貧しい少女を学校に通わせるためのプロジェクトを考えるプログラム。支援策を考える中で、資金不足や学校までの交通アクセスの悪さなどの問題にぶつかり、「難しい!」と頭を抱える姿もあった。日本とは異なる厳しい境遇に置かれた途上国の課題や、支援の成果を上げることの難しさに気付くことができた。

そして最終日、ODA増額の是非などをテーマにディベートを行い、物事を多角的にとらえることの大切さを学んだほか、総まとめとして、2日間を通して気付いたことを話し合い、それぞれが実践できる国際協力のアクションプランを作った。一人一人が一枚の画用紙に向かって思い思いに書いたプランは、「学んだ

ことをクラスで伝える」「資源を大切に」「国際協力について学べる大学に入る」などさまざま。過去の参加者の中には、実際に途上国へ足を運んだり、学生ボランティア団体を立ち上げるなど、自ら掲げたプランを実践している人も多い。

また、「日本のせいではなく生活を見直したい」「同じ志を持つ仲間もできて楽しかった」と感想を述べる彼らの生き生きとした表情を見て、「日本の将来も捨てたもんじゃないと素直に思えるようになった」と言うのは、布田さんとともにプログラムを企画している会津若松市国際交流協会の小熊則子さんだ。主催した県の職員らも「社会のためにできることを真剣に考える高校生の姿に、くつときた」「この事業は絶対続けていかなくては」と、心を一つにしている。

「途上国のことをただ学ぶだけでなく、大切なのは世界の中で自分がどう生きるかを考えること」と語る布田さん。プログラムにかかわったすべての人が「人は、人に支えられながら生きていく」という相互扶助の意識を共有し、世界や社会とのつながりを大切にする「地球市民」のネットワークを広げている。



真剣なまなざしで協力隊員の体験談に耳を傾ける高校生。合宿中、異なる世代のいろいろな大人に出会えるのも、魅力の一つだ

「高校生が途上国の文化や習慣、問題について知り、自分でできることを考え、行動に移していくきっかけづくりの場になりたい」。70年代に協力隊員としてエルサルバドルに派遣された経験を持ち、10年以上、このプログラムにかかわってきた「ふくしま青年海外協力隊の会」の布田節子さんは、福島県やJICA(財)福島県国際交流協会などと協力し、地球市民を育てるためのユニークな企画を用意している。「重視しているのは、自ら気付く、考える力を身に



「自分たちにもできる国際ボランティアを見つけ、実践しよう」とアクションプランを作成した高校生たち。プログラムの企画に携ったJICA国際協力推進員の橋本千賀子さんと布田さんのもとには、過去の参加者から、アクションプランの進行状況を伝えるメッセージが届く

「ユース国際協力ミーティング2007」参加者募集中!

今年のユース国際協力ミーティングは、世界を100人の村に例えて南北間の格差を体感できる「100人の村ワークショップ」や、協力隊の経験を伝える講座、途上国の人々の状況を寸劇で表すロールプレイなどのプログラムを行う予定で、現在、参加者募集中。
日時：2007年9月15日(土)12時～17日(月・祝)13時(2泊3日)
場所：JICA二本松(福島県二本松市)
参加対象者：福島県内在住の高校生30人
締切：8月28日(火)
参加費：4,500円
応募方法：氏名、年齢、性別、住所、電話番号、FAX番号、Eメールアドレス、学校名、学年を明記の上、下記の連絡先へ
応募先・問い合わせ：福島県庁国際交流グループ
TEL：024-521-7183 FAX：024-521-7919
Eメール：kokusai@pref.fukushima.jp
主催：福島県、JICA二本松 協力：ふくしま青年海外協力隊の会、(財)福島県国際交流協会